

『アル＝シャーフイー師の道(学派)に則って 宗教学を初めて学ぶ者の悦び』 訳注(1)

中 田 考

私のウンマ（宗教共同体）で最も優れている人々は私の世代である。次に良いのは彼らに続く世代である。そしてその次に良いのはその人々に続く世代である⁽¹⁾。

イスラームの歴史観を端的に示す有名なハディースである。

預言者ムハンマドの高弟たちの多くは、公正なカリフ、知事、裁判官、軍司令官、宣教師、求道者、などの役割を一個の人格の中に統合していた。しかし時代が経つにつれ、学問を追及する者はイスラーム諸学の学者に、信仰の純化、靈知の獲得を求める者は禁欲修行者、神秘家に、政治に関わる者は、軍人、官僚になるといった職業分化が進み、全ての徳を一身に兼ね備えたムスリムの存在は希になっていった。

本来アッラーフに仕える道であったはずのイスラーム学を取り上げてみても、学問の細分化、専門化が進むなかで、学問は栄達と名声を得る手段となり、学者たちが自らの学識を誇り、党派を組んで論争に明け暮れる、といった事態が生ずることになった。

バグダードのニザーミーヤ学院でイスラーム諸学を講じ、後にスーフイーに転じたアル＝ガザリー（d. 1111）は言う。

……自分の状態を顧みるに、私は世のしがらみに絡めとられていた。また私

は自分のさまざまな側面を吟味してみたが、私の職務について考えてみると、その中では最も良い仕事である学問の講義や教育でさえも、私は来世への道に役立たないつまらぬ学問にかかりきりになっていたのであった。また自分が教育している意図について反省してみると、その意図が純粹に神アッラーフの御尊顔のみを仰ぐものではなく、高い地位と名声を求める衝動に操られていたのであることが分かった⁽²⁾。

こうした反省の上に立ってアル＝ガザリーは、スーフィズムの靈知を基礎にイスラーム法学、神学などのイスラーム諸学に一貫した意味を与える試みを行った。彼の大著『宗教諸学の甦り』に我々は「知」、「信」、「行」に解体し失われたイスラームの原初の統合性を取り戻そうとの彼の努力の結晶を見ることが出来る。

アル＝ガザリー以降、スーフィズムはスーフィー教団の活動によって民衆の中に確実に浸透すると共に、理論的精緻化が進み「スーフィズムの学（‘ilm al-taṣawwuf）」としてイスラーム諸学の一つとしての学問の地位を確立していった。

古典法学、神学、スーフィズムが一応の学問的完成を遂げると、それらの初学者向けの平易なマニュアルが編まれるようになる。更に時代が進むと、この3つの学をもって全ての信徒が学ぶべき必須の学とし、その最低限の必修内容を纏めたいくつかの「法学・神学・スーフィズム綱要」が編まれるようになった。

前近代のスナ派世界では、法学においてはハナフィー派、マーリキー派、シャーフイー派、ハンバリー派の4学派の一つ、神学においてはアシュアリー派、マートゥリーディー派のどちらかに従い、更にいずれかのスーフィー教団に属することが、標準的なムスリムのありかたとなった⁽³⁾。

ところが西欧帝国主義列強による植民地支配とそれに続く「近代化」は、こ

の「伝統イスラーム」のエスタブリッシュメントを支えた社会制度（カリフ、ギルド、ワクフ等）を崩壊させると同時に、中世的ネオ・プラトニズム的宇宙観にも変質をもたらした。また他方では「伝統イスラーム」は、神学、スーフィズムをクルアーンとスンナからの逸脱、イスラームの歪曲とみなし法学においても学派の拘束性を否定するワッハーブ主義、サラフィー主義による厳しい批判にも晒されることになった。

しかしこうした知的状況下にもかかわらず近現代に入ってから、神学、法学、スーフィズムの3学こそが全ての信徒にとって必修であることを改めて確認する「神学・法学・スーフィズム綱要」は編まれ続けている⁽⁴⁾。

個々の部分を取ってみると、これらの綱要は、既成の法学綱要、神学綱要、スーフィズム綱要を接合したものであり⁽⁵⁾、新しく付加されたものは殆どない。しかし重要なのは個々の内容よりも、これらの綱要が数あるイスラーム諸学の中から特に神学、法学、スーフィズムを選んでムスリム必須の学としている点にある。

イスラーム学がクルアーン学、ハディース学、イスラーム法学、神学に大別されるとするなら⁽⁶⁾、クルアーン学、ハディース学ではなくまさにスーフィズムを法学と神学と並ぶ信徒必須の学とした「伝統イスラーム」と、過去の伝統を廃しクルアーンとハディースの直接参照の必要を唱えるワッハーブ主義、サラフィー主義の間の亀裂の深さが理解できよう。

ここに訳出するムハンマド・アミン・アル=クルディーの『アル=シャーフイー師の道（学派）に則って宗教学を初めて学ぶ者の悦び（Sa'āda al-Mubtadi'in fi 'Ilm al-Din 'alā Madhhab al-Imām al-Shāfi'ī）』は、こうした「法学・神学・スーフィズム綱要」の一つである。

著者のアル=クルディーは19世紀の半ば過ぎ、イラクの地方都市イルビルに、カーディリーヤ・スーフィー教団の導師の息子として生まれた。最初父についてクルアーンを習ったが、成年の後、当時のナクシュバンディーヤ教団の

大導師であったウマル・スィラージュ・アル＝ディーン (d. 1890/1) に師事し、ナクシュバンディーヤ教団スーフイズムの免許皆伝を得た。

1883年にメッカ巡礼を果たしたのち、アル＝クルディーはマディーナの預言者モスクを参詣し、そのままマディーナに数年の間逗留した。その後預言者の一族の霊廟を詣でるため、エジプトに向い、アズハル大学のクルド人学生寮に身を寄せ、ムハマド・アル＝アシュムニー (Muḥammad al=Ashmūnī al=Munūfī, d. ?) についてハディースを、ムスタファー・イッズ (Muṣṭafā 'Izz, d. ?) についてシャーフィー派法学を、また時のアズハル総長サリーム・アル＝バシャリー (Salim al=Basharī, d. ?) についてハディースとクルアーン注釈を学んだ。

アル＝クルディーはアズハル大学でイスラーム諸学を修めると同時に、当時のエジプトでは未知であったナクシュバンディーヤ教団の教えの弘宣に努めた。彼はブーラク地区のアル＝サナーニーヤ・モスクで5年間にわたりイマーム代理を勤めクルアーン読唱を教えるかたわらにナクシュバンディーヤ教団の作法に従って瞑想会を主宰した。またエジプト宗教省からブーラク地区のアブー・アル＝ファドル・モスク、次いでアル＝サナーニーヤ・モスクのイマームに任じられた後も、1914年に病をえて没する直前まで瞑想会の主宰を続けたのであった⁽⁷⁾。

イスラームには教皇も公会議もなくいわゆる「公式」の「正統教義」は存在しない。イスラームは、ウンマによって継承され読み継がれてきた古典の中のみ存在する。右の略歴からも分かる通り、ムハンマド・アミン・アル＝クルディーはこうした伝統の継承者の一人であったのである⁽⁸⁾。

本書は(1)信仰(神学)編、(2)宗教儀礼(法学)編、(3)スーフイズム編の3部構成であり、信仰編ではアッラーフの属性、預言者の属性、不可視界の諸存在、宗教儀礼編では、イスラーム法理論の基礎概念と、浄化、礼拝、喜捨、斎戒、巡礼の諸規定、スーフイズム編では、ズィクルの作法、自分自身に対する作法、

導師に対する作法，同胞に対する作法，「ハワージャカーンの封印」の式次第などのナクシュバンディーヤ教団の修行道の方法論が解説され，伝統的イスラーム学の最終形態の簡潔な見取り図を与えるものともなっている。

また本書はイスラーム学の伝統に裏打ちされつつも，専門書ではなく全てのムスリムが身に付けるべき教養を過不足なく教えることを目的とした啓蒙書である。それゆえ本書の訳出は「民衆とウラマー」，あるいは「民衆とスーフイズム」といった問題，また現代のイスラーム復興運動とウラマー，スーフイズムの対立，緊張関係を考える上でも有意義であると考えられる。

- 1 牧野信也『ハディース イスラーム伝承集成』中巻，中央公論社，1994年，262-263頁参照，『日訳 サヒーフムスリム』第3巻，日本サウディアラビア協会，1989年，498-499頁参照。
- 2 Ḥujja al-Islām Abū Ḥamid al-Ghazālī, *al-Munqidh min al-Dalāl*, Dimashq, 1990, p. 66. 「誤りからの救い」『筑摩文学大系9 インド・アラビア・ペルシャ集』，筑摩書房 昭和55年，270頁参照。
- 3 前近代においてもこうした学派別編成を批判するイブン・タイミーヤ (d. 1328) に代表される潮流も存在したが，あくまでも彼等は少数派であった。イブン・タイミーヤ (湯川武，中田考共訳) 『シャリーアによる統治 イスラーム政治論』，日本サウディアラビア協会，1991年，3-12頁参照。
- 4 筆者の入手したものとしては以下のような作品がある。
 1. イブン・アーシル ('Abd al-Wāhid Ibn 'Āshir, d. 1631), 『マーリク師の道 (学派) による宗教諸学の必修科目の助けとなる手引 (al-Murshid al-Mu'in 'alā al-Ḍarūrī min 'Ulūm al-Dīn 'alā Madhhab al-Imām Mālik)』，
なお同書には，
 - (1) アル=ハサン・ムハンマド・ファドル・アッラーフ・ブン・ヌール (Ḥasan Muḥammad Faḍl Allāh bn Nūr, d. ?, 但し同書には1882年に脱稿とある) の『確固たる成功 (al-Faḥ al-Matīn)』，
 - (2) ムハンマド・アル=ファトヒー・アル=マラークシー (Muḥammad al-Faḥ ī al-Marrākushī, d. ?, 但し同書には1925年に脱稿とある) の『固い絆 (al-Ḥabl al-Matīn)』，

- (3) ムハンマド・マヤーラ (Muḥammad Mayāra, d. 1798) の『高価な真珠，救いの水場 (al=Durr al=Thamīn wa al=Maurid al=Mu'in)』，などの注釈がある。
2. アル=カーワキジー (Abū al=Maḥāsin al=Qawāqijī, d. 1888)，『宗教の諸規範の義務に関する学生の必携 (Ghunya al=Ṭālib fi Mā yajibu min Aḥkām al=Dīn)』
3. ウバイー・アル=ハーჯジ・スルール (Ubaīy al=Ḥājj Surūr, 1921/2)，『人間に義務として課されたことに関する同胞への説明 (Ifāda al=Ikhwān fi-Mā Huwa Mafrūḍ 'alā al=Insān)』
同書には著者の息子バドル・アル=ディーン・ブン・ウバイー・アル=ハーჯジ・スルール (Badr al=Dīn bn Ubaīy al=Ḥājj Surūr, d. ?) による注釈『対象の解明 (Īdāḥ al=Ma'ān)』がある。
4. 著者不明，発行人ムハマド・ムハンマド・マーディー・アル=ラハーウィー {Muḥammad Muḥammad Mādī al=Rakhāwī, 『ナクシャバンディーヤの諸頭たちの偉業に関する聖なる光 (al=Anwār al=Qudsiya fi Manāqib al=Sāda al=Naqshbandiya)』の著者，シャーフィイー派法学者 Muḥammad Mādī al=Rakhāwī (d. 1925) の息子と思われる}，『神学と法学とスーフイズムの必修事項を網羅するアル=シャーフィイー師の道 (学派) による包括的書簡，有益な覚書き (al=Risāla al=Jāmi'a wa al=Tadhkira al=Nāfi'a 'alā Madhhab al=Imām al=Shāfi'i wa Hiya Mushtamila 'alā Mā lā Budd min-hu min al=Tauḥīd wa al=Fiqh wa al=Ṭaṣawwuf)』
5. ムハンマド・アミン・アル=クルディー (Muḥammad Amīn al=Kurdī, d. 1914)，『マーリク師の道 (学派) に則って宗教の諸規範を学ぶ者の導き (Hidāya al=Ṭālib li-Aḥkām al=Dīn 'alā Madhhab al=Imām Mālik)』，
6. ムハンマド・アミン・アル=クルディー，『アル=シャーフィイー師の道 (学派) に則って宗教学を初めて学ぶ者の悦び (Sa'āda al=Mubtadi'in fi 'Ilm al=Dīn 'alā Madhhab al=Imām al=Shāfi'i)』
7. ムハンマド・ハスブ・アッラーフ (Muḥammad Ḥasb Allāh, d. 1917)，『アル=シャーフィイー師の道 (学派) に則った宗教の基礎とシャリーアの諸分岐の一部についての見事な庭園 (al=Riyāḍ al=Badi'a fi Uṣl al=Dīn wa Ba'd Fūrū' al=Sharī'a 'alā Madhhab al=Imām al=Shāfi'i)』(本書は神学，スーフイズムに比して著しく法学に比重がかかった綱要となっている)
同書にはムハンマド・ヌーリー・アル=ジャーウィー (Muḥammad Nūrī al=

- Jāwī, d. 1898) による注釈『熟した果実 (al=Thimār al=Yāni')』がある。
8. イブラーヒーム・サラーマ・アル＝ラーディー (Ibrāhīm Salāma al=Rādī, d. ?) 『法学, スーフイズム, 唯一神論についての弟子の手引 (Murshid al=Murid fi al=Fiqh wa al=Taṣauwuf wa al=Tauḥid)』 (序文奥付 1962 年) (但し本書の神学部分は構成に纏まりを欠き, 伝統的神学綱要のスタイルからは外れている)
- 5 神学の創成期の綱要としてはアブー・ハニーファ (d. 767) の『大学 (al=Fiqh al=Akbar)』, アル＝タハーウィー (al=Tahāwī, d. 933) の『タハーウィー信条 (al=Aqida al=Tahāwīya)』などがあるが, 「神学・法学・スーフイズム綱要」の神学部分はむしろアル＝サヌースィー (Muḥammad al=Sanūsī, d. 1490) の『唯一神論者の信条 (‘Aqida Ahl al=Tauḥid)』, アル＝ラカーニー (al=Laqānī, d. 1631) の『宝玉 (al=Jauhara)』, アル＝ファダーリー (Muḥammad al=Faḍālī, d. 1820) の『大衆の充足 (Kifāya al=‘Awāmm)』, アル＝マルズーキー (Aḥmad al=Marzūqī, d. ?) の『大衆の信条 (‘Aqida al=‘Awāmm)』 (1864 年脱稿) などの後代の神学綱要の系列に属するものである。

また法学に関してはハナフィー派のアル＝タハーウィーの『タハーウィー綱要 (Mukhtaṣar al=Tahāwī)』, シャーフィイー派のアル＝ムザニー (al=Muzanī, d. 878) の『ムザニー綱要 (Mukhtaṣar al=Muzanī)』, マーリキー派のアル＝ウトゥビー (al=Utbī, d. 869) の『ウトゥビー綱要 (al=Utbīya)』, ハンバリー派のアル＝ヒラキー (al=Khiraqī, d. 946) の『ヒラキー綱要 (Mukhtaṣar al=Khiraqī)』などの網羅的な法学綱要は既に 9/10 世紀には成立しているが, 「神学・法学・スーフイズム綱要」の法学部分は宗教儀礼規定 (‘ibādāt) のみの要約であり, ハナフィー派のアル＝シュルンブラーリー (al=Shurunbulālī, d. 1659) の『解明の光り (Nūr al=‘Iḍāḥ)』, シャーフィイー派のアブド・アッラーフ・バー・ファドル (‘Abd Allāh Bā Faḍl al=Ḥaḍramī, d. 1512) の『ハドラミー入門書 (al=Mūqaddima al=Ḥaḍramīya)』, マーリキー派のアル＝アシュマーウィー (‘Abd al=Laṭīf al=‘Ashmāwī, d. 1670) の『アシュマーウィーの韻文要約 (al=‘Ashmāwīya)』などの宗教儀礼規定のみのマニュアルに対応している。

スンナ派イスラームの学派別編成は, 法学においてはハナフィー派, マーリキー派, シャーフィイー派, ハンバリー派の 4 学派, 神学においてはアシュアリー派, マートルディー派の 2 学派体制が 11-13 世紀頃に確立した。他方スーフイズムに関しては, アル＝サッラージュ (al=Sarrāj, d. 988) の『スーフイズムに関する光の書 (Kiāb al=Luma‘ fi al=Taṣauwuf)』, アル＝カラーバーズィー (al=Kalābādhi, d. 995) の, 『スーフイーの道の紹介の書 (Kiāb al=Ta‘arruf li-

Madhhab Ahl al-Taṣawwuf』, アル=マッキー (Abū Ṭālib al-Makkī, d. 996) の『心の糧 (Qūt al-Qulūb)』, アル=クシャイリー (al-Qushairī, d. 1074) の『論考 (al-Risāla)』などの著作によって古典スーフイズムの教義の基礎がおかれた後, 12世紀頃にはカーディリーヤ教団, スフラワルディーヤ教団, リファーイーヤ教団などの教団が成立するが, その後も現在に至るまで新教団創立の過程は継続しており, 教団の数の正確な把握は困難である。また教義, 修行論のマニュアルも教団によってかなりの違いがあり, 「神学・法学・スーフイズム綱要」もスーフイズムの綱要の部分には, 神学, 法学の部分に見られる均質性は存在しない。

なお‘Abd al-Ḥamid al-Shāfi‘ī (d.?) の『マーリク師の道 (学派) に基づくイスラームの諸原理の知識への大衆の導き (Hidāya al-‘Awāmm li-Ma‘rifa Qawā‘id al-Islām ‘alā Madhhab al-Imām Mālik)』, Muḥammad bn ‘Abd Allāh al-Jaradānī (1897年には生存) の『義務となる諸規定への大衆の実用 (Mufid al-‘Awāmm li-Mā yalzimu-hum min al-Aḥkām)』, Muḥammad Muṣṭafā al-Ṣāwī (1899年には生存) の『宗教の基本と枝葉に於ける唯一神論者の救済 (Najā al-Muwahhidīn fi Uṣūl wa Furū‘ al-Dīn)』のような神学と法学のみを必修の学とする「神学・法学」綱要も存在する。但し『宗教の基本と枝葉に於ける唯一神論者の救済』の法学部門は, ハナフィー派, シャーフィイー派, マーリキー派の宗教儀礼規定を網羅するものである。

- 6 小杉泰, 「ウラマーと法」, 『イスラームを学ぶ人のために』世界思想社, 1993年, 37頁。

但し10世紀に書かれた『諸学の鍵 (Miftāḥ al-‘Ulūm)』は, シャリーアに関わるアラブの学として, 法学, 神学, 文法学, 書記学, 詩学, 歴史伝承学をあげるのみで, クルアーン学, ハディース学をシャリーア関連学として分類していない。またシャーズィリーヤ教団のスーフイーであったアル=シャアラニー (d. 1560) の『周知の (イスラーム) 諸学の神髄に関する散りばめられた真珠』のあげる宗教諸学は, 1. クルアーン注釈学, 2. クルアーン読唱学, 3. 法学, 4. 法源学, 5. 宗教基礎学 (神学), 6. 文法学・意味論・修辞学, 7. スーフイズムの学, とありアル=シャアラニー自身がハディース学者であったにもかかわらず, ハディース学は「周知のイスラーム諸学」の中に数えられていない。cf., Abū ‘Abd Allāh Muḥammad bn Aḥmad bn al-Khuwārizmī, *Miftāḥ al-‘Ulūm*, Beirut, n. d., ‘Abd al-Wahhāb al-Sha‘rānī, *Kitāb al-Durar al-Manthūra fi Bayān Zubad al-‘Ulūm al-Mashhūra*, Beirut-Cairo, n. d.

- 7 cf., Muḥammad Amin al-Kurdī, *Khulāṣa Kitāb al-Mawāhib al-Sarmadiya fi*

Manāqib al=Sāda al=Naqshbandīya, Cairo, n. d., p. 110-166. 同書はアル=クルディーの名になっているが、息子ナジュム・アル=ディーン (Najm al=Din) が、ムハンマド・アミン・アル=クルディーの『ナクシュバンディーヤ教団の貴顕たちの偉業に関する永遠の贈物の書』を要約しアル=クルディーの名を冠して出版したものであり、ナジュム・アル=ディーンは同書の中で、アル=クルディーの生涯についても頁を割いている。

なおアル=クルディーは『アル=シャーフィイー師の道 (学派) に則って宗教学を初めて学ぶ者の悦び』の他に、

1. 『マーリク師の道 (学派) に則って宗教の諸規範を学ぶ者の悦び (Hidāya al=Ṭālib li-Aḥkām al=Dīn ‘alā Madhhab al=Imām Mālik)』,
 2. 『ナクシュバンディーヤ教団の貴顕たちの偉業に関する永遠の贈物の書 (Kitāb al=Mawāhib al=Sarmadiya fi Manāqib al=Sāda al=Naqshbandīya)』,
 3. 『幽玄界の知悉者との交わりにおける魂の照明 (Tanwīr al=Qulūb fi Mu‘āmala ‘Allām al=Ghuyūb)』,
 4. 『聖法と真理の遵守のための確固たる約束事 (al=‘Uhūd al=Wathīqa fi al=Tamassuk bi-al=Sharī‘a wa al=Ḥaqqīqa)』,
 5. 『両配偶者の権利義務 (の学習) を必要とする者の指針 (Irshād al=Muhājir ilā Ḥuqūq al=Azwāj)』,
 6. 『4 法学派による巡礼の儀の説明に関する求道者の成功 (Fath al=Masālik fi Idāḥ al=Manāsik ‘alā al=Madhāhib al=Arba‘a)』,
 7. 『4 法学派による齋戒の諸規定への民衆の案内 (Murshid al=‘Awāmm Ilā Aḥkām al=Ṣiyām ‘alā al=Madhāhib al=Arba‘a)』,
- など、法学、スーフイズムに関する著作を残している。cf., Muḥammad Aḥmad Darnīqa, *al=Tariqa al=Naqshbandīya wa A‘lām-hā*, Paris, n. d., pp. 130-131, ‘Umar Riḍā Kaḥḥāla, *Mu‘jam al=Mu‘allifin*, Beirut, n. d., vol. 9, pp. 77-78, al=Zereḳly, *al=A‘lam*, Beirut, 1986, vol. 6, p. 43.
- 8 イスラームには西歐的な「オリジナリティー」重視の思想はない。逆に作品の価値は伝統に正しく立脚しているか否かによって決まるとも言える。

訳注の作成にあたっては、神学、法学に関しては権威ある古典綱要及び現代の標準的教科書の対応箇所を示し、本書がいかに古典イスラーム学の伝統に忠実であるかが見取れるように配慮したが、煩雑を避けるために引用する綱要の数は最小限に押さえた。特に均質性の高い法学に関しては、古典シャーフィイー派法学の大成者とも見做されるアル=ラーフィイー (‘Abd al=Karīm al=Rāfi‘ī, d.

1162) とアル=ナワウィー (Yahyā al=Nawawī, d. 1277) の見解を纏めたシハーブ・アル=ディーン・アル=ミスリー (Ibn al=Naqīb, d. 1368) の『旅人の支え、修行者の備え』及び、宗教儀礼のみを纏めたアブド・アッラーフ・バー・ファドルの『ハドラーミー入門書』に対応句がない場合にのみ、アル=ナワウィーの『学生の園、法判断を下す者の支え』(全12巻)、アル=シャーフィイー・アル=サギール (Muḥammad al=Ramlī, d. 1596) の『求める者の終着』(全8巻)、現代シリアの3名の学者の共著『シャーフィイー派の方法論に基づく法学』(全8巻)などの浩瀚な法学書の対応箇所を記した。

スーフィズムに関しては、主としてアル=クルディーと同じ法統を次ぐアミーン・アル=ナクシュバンディーの『スーフィズムとは何か、ナクシュバンディーヤとは何か』(Dr. Muḥammad Sharif Aḥmadによるクルド語からアラビア語への翻訳)、現代の研究者Dr. ムハマド・アフマド・ダルニーカによる研究書『ナクシュバンディーヤ教団とその著名人』を参照しつつアル=クルディーの属するナクシュバンディーヤ教団の教説との対応を明らかにするように配慮した。

なお、紙数の制約により宗教儀礼(法学)編、スーフィズム編の訳注は次号にまわす。

『アル=シャーフィイー師の道(学派)に則って宗教学を初めて学ぶ者の悦び』

慈悲遍く仁愛厚きアッラーフの御名に於いて

僕^{しもべ}を愛し給うとき、その僕^{しもべ}にイスラームについての理解を恵み給うアッラーフにこそ称えあれ。ムハンマドとその一統、教友たち全てに祝福と平安あれ。

助け主に援助を請う貧しき僕^{しもべ}ムハンマド・アミーン・アル=クルディー・アル=ナクシュバンディー⁽¹⁾は言う。

本書は、小さな娘と息子たちのために編んだ小冊子であり⁽²⁾、『宗教学を初めて学ぶ者の悦び』と名付けたものである。

以下の事を知りなさい。アッラーフは私、そしてあなたに成功を恵まれ、我らを正しい道に歩ませ給う。

ほむべきかな至高なるアッラーフが世界を創造されたのは、ただアッラーフ

を知るために他ならないこと⁽³⁾、そしてアッラーフが人間とジンを創造されたのは、彼らがアッラーフを崇拜するするために他ならないことを⁽⁴⁾。

それゆえ義務能力を持つ者全員に最初に義務となるのは、至高なるアッラーフについて(1)必然的であること、(2)不可能であること、(3)可能であること⁽⁵⁾、また諸使徒たちについても同様なこと、また諸使徒たちの舌を通して明かされた天使や諸啓典など、信仰が正しいものとなるために必要な諸々の事柄について知ることである。

ついで「浄め」、あるいは立派に務めを果たした言える最低限の礼拝、といった宗教儀礼についての様々な「規定」、「構成要件」、「条件」、「失効事項」などについて知ることが義務となる。

ついで(最後に)彼(義務能力を持つ者)は、完全無欠な導師の手によってスーフィーの師たちの修行道に勤しむことになる。というのは信仰の教義を知らず、宗教儀礼の諸規定を学んでいない者は、その礼拝も、齋戒も、スーフィーの師たちの修行道の実践も無益であり、正しい信仰と結付いていない行為はアッラーフの御許では受入れられないからである。

それ故私は本書で、信仰とアル＝シャーフィイー——アッラーフが彼を嘉されますように——の道(学派)に基づく宗教儀礼('ibādāt)について正しておく必要のあることを纏めたのである。

第1部：信仰編

私は言う。アッラーフには20の属性(ṣifa)が必然的であり、その反対(属性)が不可能である⁽⁶⁾。

1. 誉むべきかな至高なるアッラーフは存在し、非在でない。

もしアッラーフが非在であれば被造物(世界)も存在しえないから⁽⁷⁾。

2. その存在に初めなく無始であり、生成したものでない⁽⁸⁾。

もし生成したのならそれは被造物となるが、それは誤りであるから。

3. その存在に終りなく無窮であり、消え逝くものではない。

もし消え逝くものならそれは生成物となるが、それは誤りであるから⁽⁹⁾。

4. 生成するものと乖違し、何物もアッラーフに似ることはない。

もしアッラーフが何かと似るなら、それは生成物となるが、それは誤りであるから⁽¹⁰⁾。

5. 自存し(qā'im bi-nafs-hi)、存在因(mūjid)、内属する基体(maḥall yaqūm bi-hi)を要しない。

もし存在因(mūjid)を要するなら、アッラーフは生成物となり、基体を要するなら、アッラーフは属性になってしまい、いずれも誤りであるから⁽¹¹⁾。

6. その本質、属性、行為に於いて唯一である。

もし複数であれば、この被造物(世界)の何ものも存在しえないから⁽¹²⁾。

7. 彼には「能力」があり、それによって存在と非在を決定する。

もしアッラーフが無力であれば、この被造物(世界)の何ものも存在しえないから。

8. 意思。それによって「可能(的存在)者(mumkin)」に、存在か非在、あるいは富裕か貧困など(の偶有)を特定するのであり、アッラーフは不満者(kāriḥ)ではない。

もしアッラーフが不満者であれば、アッラーフは無力であることになるが、それは不可能であるから。

9. 普遍(kulliyāt)と個物(juz'iyāt)の万物に関する知識⁽¹³⁾。

もし知者でなければ、無知者であることになるがそれはありえないから。

10. 生命。

もし生きていなければ死んでいることになり、この世界の何ものも存在せしめられないことになるが、それは誤りであるから。

11. 存在するもの全てに対する聴覚。

12. 存在するもの全てに対する視覚。

アッラーフは耳なく聞き、眼 (ajfān) なく御覧になり⁽¹⁴⁾、天地にあるものは何もかも、その聴覚、視覚から逃れることができない。もしアッラーフが聴覚、視覚により形容されないとすれば、アッラーフは壘・盲と言われなければならないが、それらは欠陥の属性であり、アッラーフに欠陥が帰されることはありえないのである。

13. 発話。

アッラーフは文字や音によらずして、不断、永遠に発話しておられる⁽¹⁵⁾。もしアッラーフが発話により形容されないとすれば、アッラーフは啞と言われなければならないが、それは欠陥の属性であり、アッラーフに欠陥が帰されることはありえないのである。

14. 能者であること⁽¹⁶⁾。

15. 意思者であること。

16. 知者であること。

17. 生者であること。

18. 聴者であること。

19. 見者であること。

20. 話者であること。

「能者であること」の意味は、「能力」が至高なるアッラーフの本質に内属することであり、至高なるアッラーフが、「能者であること」が確定されれば、アッラーフが「無能者であること」はありえず、残りの属性についても同様なことが言えるのである。

また至高なるアッラーフについては、存在させること、非在とすること、使徒の派遣、啓典の啓示など、全ての起りうる行為を行うこと、及び行わないことが可能である⁽¹⁷⁾。至高なるアッラーフは、何者に対してもいかなる義務も負わない。さもなければアッラーフは被拘束 (maqhūr) ということになるが、それは誤りであるから。

使徒については以下のことを信じなければならない。アッラーフが諸使徒を遣わしたのは、その慈悲、恩寵として、被造物（人）を真理へと招くためである。また彼らは（アッラーフとその使徒たちに）従う者たちへの報酬の福音を宣べ伝え、背く者への罰を警告する者、現世と来世の幸せを人々へ明かす者、啓示を特に授けられた者である。また彼らは、ムハンマド——彼にアッラーフの祝福と平安あれ——の指の間から水が溢れ出したこと⁽¹⁸⁾や、その祈願によって月が割れたこと⁽¹⁹⁾のような、日常性を超えた事柄である奇跡によって神佑を授かった者なのである。

使徒には4つの属性が必然的に附随しなければならず、その反対属性が附随することは不可能である⁽²⁰⁾。

先ず「正直 (ṣidq)」であり、彼らは虚言者であってはならない。もし彼らが虚言者であるなら彼らが正直者であるとのアッラーフの御言葉が嘘であることになるが、それは誤りであるからである。

次いで「至誠 (amāna)」であるが、「至誠」とは外的であれ、内的であれ全ての背徳 (ma'āṣi) から免れていることである。なぜならもし彼らが背徳の徒なら、彼らに従うことをアッラーフは命じられないからである。

まことにアッラーフは不品行を命じ給うことはない(クルアーン7章28節)

次いで被造物への伝達を命じられたことの「伝達 (tabligh)」である。もし彼らがそれを隠したとするなら、知っていることを隠す者は（アッラーフに）呪われた者であるにも拘らず、我々は知っていることの隠蔽を命じられていることになるからである。

次いで「賢明」であり、彼らは愚者であってはならない。もし愚者であれば論敵を論破できない筈だが、彼らは論破しているからである。

使徒に付与されるものとしては、彼らの高い地位を傷付けない人間的性質である。つまり、飲食、合法的な性交、心でなく目の眠りなのである⁽²¹⁾。

クルアーンの中で名指して述べられた預言者と使徒は信じなくてはならない⁽²²⁾。それは25人の使徒であり、アダム(アダム)、イドリース(エノクと言われる)、ヌーフ(ノア)、フード、サーリフ、イブラーヒーム(アブラハム)、ルーツ(ロト)、イスマーイール(イシュマエル)、イスハーク(イサク)、ヤアクーブ(ヤコブ)、ユースフ(ヨセフ)、アイユーブ(ヨブ)、シュアイブ、ムーサー(モーゼ)、ハールーン(アロン)、ズウ=アル=キフル(エゼキエルと言われる)、ダウド(ダビデ)、スライマーン(ソロモン)、イルヤース(エリヤ)、アル=ヤサウ(エリシャと言われる)、ユ=ヌス(ヨナ)、ザカリーヤ(ザカリヤ)、ヤフヤー(ヨハネ)、イーサー(イエス)、ムハンマド——彼らに祝福と平安あれ——である⁽²³⁾。

被造物の中で最も優れた者は使徒であり、使徒の中で最も優れた者は我らが長^{おき}ムハンマド——彼にアッラーフの祝福と平安あれ——であり⁽²⁴⁾、使徒に次いで人の中で優れた者は、「篤信者」アブー・バクル(初代正統カリフ)であり、次いでウマル・ブン・アル=ハッターブ(第2代正統カリフ)、ウスマーン・ブン・アッファーン(第3代正統カリフ)、アリー・ブン・アビー・ターリブ(第4代正統カリフ)であり、次いで「天国を約束された10人」の残り、即ちタルハ、アル=ズバイル、アブド・アル=ラフマーン・ブン・アウフ、サアド・ブン・アビー・ワッカーズ、サイード・ブン・ザイド、アブー・ウバイダ・アーミル・ブン・アル=ジャッラーフであり、次いでバドルの戦いの参加者、次いでウフドの戦いの参加者、次いで「嘉納のバイア(忠誠の誓い)」の参加者、そして残りの(使徒の)直弟子であり、次いで孫弟子、ついで曾孫弟子である⁽²⁵⁾。

天使について、一般的に彼らがアッラーフの僕であり、その被造者の一つであることを信じなくてはならない。天使は男性とも女性とも言えず⁽²⁶⁾、その数はアッラーフのみが御存知である⁽²⁷⁾。彼らは死ぬことはない⁽²⁸⁾。

(天使は) アッラーフが命じ給うたことに背くことはなく、命じられたことを行う (クルアーン 66章6節)。

個別的には、啓示を司るジブリール(ガブリエル)、降雨と食物の供給を司るミーカイル(ミカエル)、(終末の)ラッパを吹く役目を負うイスラーフィール、魂を取上げるアズラーイール、墓での尋問を担当するムンカルとナキール、火獄の番人であるマーリク、天国の番人であるリドワーンの8人を信じなくてはならない。またアッラーフが、2人の天使を、一人が善行を書留め、他方が悪行を書留めさせるため、全ての僕に遣わされ、彼らはその僕が死ぬまで、彼の許を離れないことを信じなくてはならない⁽²⁹⁾。

またアッラーフの預言者、使徒らに下された天啓の諸啓典を信じなくてはならない。そしてまた、それらがアッラーフの言葉であること、それには、ムーサーに下された「律法」、ダーウードに下された「詩篇」、イーサーに下された「福音書」、ムハンマドに下された「判別(クルアーン)」があることを信じなくてはならない⁽³⁰⁾。そしてクルアーンは、それらの中でも最も優れて偉大なものであり、それ以前の全てを廃棄するものであり、その規定は復活の日まで有効なのであり、いかなる変更も生じないのである⁽³¹⁾。一方現存する「律法」、「詩篇」、「福音書」はユダヤ教徒キリスト教徒の手によって歪曲され改変されたものなのである⁽³²⁾。

また全ての生者には決まった寿命があることも信じなくてはならない⁽³³⁾。殺された者も焼死した者も、溺死した者も、各人の寿命を迎えて死んだのである。

誰であれ寿命を迎えた者は、アッラーフはそれを遅らせ給わない(クルアーン 63章11節)

またアッラーフが、死者に魂と聴覚と視覚を戻され、死者に対して、彼の神、宗教、預言者について審問する2人の天使（ナキール、ムンカル、前出）を遣わし給うことを信じなくてはならない⁽³⁴⁾。

我らが主よ、あなたは我らを2度死なしめ給い（クルアーン 40 章 11 節）

最初の死はこの世での死であり、2度目の死とは審問の為に（墓の中で）甦った後での墓の中での死である。

そしてあなたは我らを2度甦らしめ給うた（クルアーン 40 章 11 節）

一度目の甦りは墓での審問の為にであり、2度目は復活の為にである。

また死者の墓中での懲罰と安楽を信じなくてはならない⁽³⁵⁾。それはたとえ焼かれ灰となり、空中を舞う塵と成り果てていたとしても、霊と肉体の両方に及び、不信仰者であるか、信仰者（ムスリム）であっても悪人であったなら⁽³⁶⁾、懲罰に苦しめられるのである。

我らは彼らを2度罰する（クルアーン 9 章 101 節）

つまり一回はこの世で殺され、辱められることなどである。

その後で、彼らは激しい懲罰のために呼び戻される（クルアーン 9 章 101 節）

つまり復活の日に、との御言葉からも、もう一度は墓の中での死である。

また「彼らは朝な夕な火に晒される」（クルアーン 40 章 46 節）、とは墓での

話である。というのは「時が到来した時、フィルアウン（ファラオ）の一族をより苛酷な懲罰に投込め」（クルアーン 40 章 46 節）とされているからである。信仰者であった場合には安楽を楽しむ。

墓は天国の楽園の一つであるか、火獄の穴の一つである（ハディース）⁽³⁷⁾

また（最後の）「時」の到来と、イスラフィールが全ての被造物の応報と清算のためにラッパを吹き鳴らすことを信じなくてはならない⁽³⁸⁾。

我らは「時」を嘘だとする者に火獄を用意している（クルアーン 25 章 11 節）

ラッパが吹き鳴らされる日、おまえたちは群れをなして来る（クルアーン 78 章 18 節）

また復活を信じなくてはならない。それはアッラーフが全ての被造物を死後に甦らせることである。復活は霊と身体によってである⁽³⁹⁾。

まことにアッラーフは墓の中にいる者を復活させ給う（クルアーン 22 章 7 節）

また帳簿を与えられることを信じなくてはならない⁽⁴⁰⁾。万人は善悪の所業を記された帳面を与えられるのである。

おまえたちの書面を読み。この日おまえの魂が、おまえにとって十分な清算者である。（クルアーン 17 章 14 節）

ただしそれは預言者、天使、清算なしに天国に入れる者以外についてである。また清算を信じなくてはならない⁽⁴¹⁾。言葉であれ、行為であれ、善悪の所業が清算されるのである。

この日、全ての魂は稼いだことについて報いられる。その日不正はない。まことにアッラーフは清算に迅速な御方。(クルアーン 40 章 17 節)

また両腕と舌を持つ天秤があり、所業あるいはそれを記した帳簿が計られることをも信じなくてはならない⁽⁴²⁾。

復活の日、我らは正義の天秤を据えるが、誰もそれによって不正に扱われることはない (クルアーン 21 章 47 節)

また「アッ=スィラート」も信じなくてはならない⁽⁴³⁾。「アッ=スィラート」とは地獄の上に架けられた橋であり、髪の毛よりも細く、刀の刃よりも鋭い。それを渡る人の通過速度は、その人の心にかつて生じたアッラーフの禁じられたものの忌避の程度に比例する。アッラーフの禁じられたものを忌避することに最も鋭敏であった者は、その日最も迅速に通過し、中には稲妻のように渡り切る者さえいるのである。

アッ=スィラートは地獄の中に架けられるが、それを最初に渡るのは私と我がウンマである」(ハディース)⁽⁴⁴⁾

また「立場(法廷)」にある我らの預言者の「湖」も信じなくてはならない⁽⁴⁵⁾。

私の湖は距離にして一ヵ月、岸辺は直線である。その水は牛乳よりも白く、

その香りは麝香よりも芳しく、その杯の数は天の星より多く、その水を飲むものは決して渴くことはない。(ハディース) (46)

また天国と火獄が現存し、報奨と懲罰のためにアッラーフが創造されたことを信じなくてはならない(47)。アッラーフは天国については「(アッラーフを)畏怖する者のために用意された」(クルアーン3章133節)と言われ、火獄については「不信仰者のために用意した」(クルアーン3章131節)と言われている。またそれらは消滅することはなく、またその住人も滅びることはない。

彼らは天国の住人であり、彼らはそこに永遠にとどまる(クルアーン7章42節)

彼らは火獄の住人であり、彼らはそこに永遠にとどまる(クルアーン10章27節)

また信仰者は、来世でアッラーフを目で見ることを信じなくてはならない。ただしその具体的様態は分らず、また全てを把握できるわけではない(48)。

その日、その主に見え、顔は照り輝く(クルアーン75章22節)

また復活の日の審判の判決に際する預言者——彼にアッラーフの祝福と平安あれ——の執り成し、つまりこのウンマ(イスラーム共同体)の罪人たちのための執り成しを信じなくてはならない(49)。

汝の主は汝を「称えられるべき場所」につかせられよう(クルアーン17章79節)

この「称えられるべき場所」とは審判の判決の際の執り成しの場のことである。

誉むべきかな至高なる我が主が私に、「ムハンマドよ、もう満足したか」と尋ね給い、「はい。我が主よ。満足いたしました。」と答えるまで、私は我がウンマの執り成しを続ける（ハディース）⁽⁵⁰⁾

同様に全ての預言者たち——彼らに祝福と平安あれ——の執り成し、学者、篤信者、殉教者、義人、聖者の執り成しも（信じなくてはならない）

復活の日には預言者が執成し、次いで学者が執り成し、次いで殉教者が執り成す（ハディース）⁽⁵¹⁾

また聖者とその奇跡も信じなくてはならない⁽⁵²⁾。もし誰かが聖者を傷付けようとしても、その（傷付けようとした）者が逆に傷つくのは、至高なるアッラーフのその聖者への佑けによるのである。

まことにアッラーフは信仰する者たちを護られる（クルアーン 22 章 38 節）

しかし聖者はいかに優れていても預言者の高みに達することはない。むしろ一人の預言者でさえ、聖者全てを合せたより尊いのである。また聖者はいかにその位階が高く揚げられようとも、戒律から自由になることはない。義務賦課から自由な境地に達したと主張する者は不信仰者である。

また「玉座」をも信じなくてはならない⁽⁵³⁾。それは光からなり大いなる高みにある物体である。

彼は大きいなる玉座の主であらせられる（クルアーン9章129節）

また「台座」についても⁽⁵⁴⁾。それは玉座の下にある光からなる物体である。

台座の広さは天地を覆う（クルアーン2章255節）

また「書板」についても⁽⁵⁵⁾。それは光からなる物体であり、至高なるアッラーフのお許しを得て、筆がそこに復活の日までに起ることを書き記すのである。

護られた書板の中に（クルアーン85章22節）

また「筆」についても⁽⁵⁶⁾。それは光からなる物体で、至高なるアッラーフがそれを創造され、復活の日までに起ることを書き記すよう命じられた。

ヌーン。筆とその書き記すものにかけて（クルアーン68章1節）

またアッラーフがこれらの4つのもの（玉座、台座、書板、筆）を創造されたのは、必要からではなく、至高なるアッラーフ（のみ）が御存じである御神慮に基づいてのことであることを（信じなくてはならない）。

また予定 (qaḍā') をも信じなくてはならない⁽⁵⁷⁾。それは、万象がまさにそれが実現したようにあるようにと永遠の過去よりアッラーフが意志されておわしたということを意味する。

また運命 (qadar) も。それはアッラーフが、永遠の過去からのアッラーフの御意志に添って具象化した (khaṣṣaṣa) 通りに万象をあらしめ給うことである。それゆえ我々が経験する幸せ、不幸、快苦は全て至高なるアッラーフの御許からのものであり、アッラーフは永遠の過去に意志された通りに現在それを我々に生じせしめ給うたのである。

言え。全てはアッラーフの御許からのものである。(クルアーン 4 章 78 節)

言え。アッラーフが我々に定め給うたこと以外の何事も我々には起きはしない。(クルアーン 9 章 51 節)

まことに我らは万象を、運命として創造した (クルアーン 54 章 49 節)

訳 注

- 1 本書及びその姉妹編である『マーリク師の道 (学派) に則った宗教の諸規定への学生の導き』は、nqshbndyt にNaqshabandiyaとshに母音aをふって呼んでいるが、本稿では通例に従ってNaqshabandiyaと読むことにする。
- 2 「小さな娘と息子たち」とは、ナクシュバンディーヤ教団の弟子を指す比喻であり文字通りに児童を指すわけではない。アル=クルディーは、『マーリク師の道 (学派) に則った宗教の諸規定への学生の導き』の中で、以下のように述べている。

私は、エジプトの隅々にまでナクシュバンディーヤ教団を広める栄誉をアッラーフから授かった者である。しかるに私の弟子の中には、シャーフィイー派、マーリキー派、ハナフィー派の者がいたため、彼らに対して宗教の基礎と詳細を各自の法学派に則って教える必要があった。それゆえ私は初学者が霊知者の道 (ṭarīqa al-‘arīfin) に勤しむより前に (学習を) 必要とするものについて、3 法学派の夫々に対応する 3 つの小著を編もうと考えた。Hidāya al-Ṭālibīn li-Aḥkām al-Dīn ‘alā Madhhab al-Imām Mālik, p. 2.

つまり『アル=シャーフィイー師の道 (学派) に則って宗教学を初めて学ぶ者の悦び』は『マーリク師の道 (学派) に則った宗教の諸規定への学生の導き』と並び、アル=クルディーが 3 つの法学派に属する弟子を念頭において作成したイスラーム学入門書 3 部作の 1 冊なのである。(ハナフィー派の入門書は完成を見なかったものと思われる)

本稿の翻訳に『アル=シャーフィイー師の道 (学派) に則って宗教学を初めて学ぶ者の悦び』を選んだ理由は、アル=クルディー自身の属する法学派がシャー

フィイー派であるためである。ちなみにアル=クルディー自身の神学的立場は必ずしも明らかではないが、彼の実子で学者でもありアル=クルディーの*Kitāb al=Mawāhib al=Sarmadiya*を要約して出版しているNajm al=Dīn al=Kurdiがシャーフィイー派・アシュアリー派であることから、アル=クルディー自身もアシュアリー派であったものと思われる。

なお翻訳の第1部：信仰編，第2部：宗教儀礼編，第3部：スーフイズム編，の小見出しは訳者によるものである。

- 3 「私は隠された宝であったが，知られることを欲して，知られんがために被造物を創造した」とのスーフイーの好んで引用する神聖ハディースに基づく。cf., William C. Chittick, *Faith and Practice of Islam*, Albany, 1992, p. 201.

- 4 以下，引用。

我（アッラーフ）が人間とジン（幽精）を創造したのは，ただ我を崇拜せんがために他ならぬ（クルアーン 51章 56節）。

- 5 以下，引用。

理性による判断は「必然」，「不可能」，「可能」の3つ纏められる。「必然」とは「その不在を理性が想像することのできないもの」，「不可能」とは「その存在を理性が想像することのできないもの」，「可能」とは「理性にとって，その存在も不在も（共に）妥当で有（り得）るあるもの」である。al=Sanūsī, *Matn al=Sanūsīya (Majmū' Mutūn al=Tauḥīd)*, Cairo, 1355[h.]), p. 2, cf., al=Dardīr, *Matn al=Kharīda (Majmū' Mutūn al=Tauḥīd)*, Cairo, 1355[h.]), pp. 1-2, al=Bājūrī, *Matn al=Bājūrī (Majmū' Mutūn al=Tauḥīd)*, Cairo, 1355[h.]), p. 12, al=Laqānī, *Matn al=Jauhara (Majmū' Mutūn al=Tauḥīd)*, Cairo, 1355[h.]), p. 26, Muḥammad al=Faḍālī, *Kifāya al='Awāmm* (al=Bājūrī, *Tahqīq al=Maqām*, Cairo, 1949), p. 20, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *Mi'rāj al=Murīd fī 'Ilm al=Tauḥīd*, Cairo, 1954, p. 6.

- 6 アッラーフの必然的的属性を20と数えるのは神学要綱の慣例となっている。cf., al=Sanūsī, *op. cit.*, p. 2, al=Dardīr, *op. cit.*, pp. 2-4, Muḥammad al=Faḍālī, *op. cit.*, p. 25, al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdiyya* (Muṣṭafā bn Aḥmd al='Uqbāwī, *Hāshīya 'alā Sharḥ 'Aqīda al=Dardīr fī al=Tauḥīd*, Cairo, n. d.), p. 24, Muṣṭafā al=Bakrī al=Ṣiddīqī, *Fawā'id al=Fawā'id fī Dabṭ al='Aqā'id* (al=Dardīr, *Sharḥ 'alā Fawā'id al=Fawā'id*, Cairo, 1314, [h]), p. 10.

但しこれはアル=マートゥリーディー (d. 944) の数え方であり、アル=アシュアリー (d. 935) によると 13 である。

(アッラーフについて必然的であるのは、アル=アシュアリーの見解では 13 の属性であり、アル=マートゥリーディーの見解によると 20 である。この相違の原因は、アル=アシュアリーは、イデア的属性(後述)を諸イデアとは別の(zā'ida)属性であるとは見做さないが、アル=マートゥリーディーは違うからである。Saiyid 'Ali Ḥaidr, *op. cit.*, p. 8.

またこれら神学綱要は通例としてこの 20 の属性を更に 4 種に分類する。

またこの 20 の必然的属性は、(1)自体的属性 (ṣifa nafsiya), (2)否定的属性 (ṣifa salbiya), (3)諸イデア=属性 (ṣifa al=ma'āni), (4)イデア的諸属性 (ṣifa ma'nawīya) に 4 分される。

- (1) 自体的属性とは「存在」1つだけであり、
- (2) 否定的属性は①「無始」、②「無窮」、③「生成物との相違」、④「自存」、⑤「唯一性」の5つであり、
- (3) 諸イデア (=属性) は、①「能力」、②「意思」、③「知識」、④「生命」、⑤「聴覚」、⑥「視覚」、⑦「発話」の7つ、
- (4) イデア的諸属性は①「能者であること」、②「意思者であること」、③「知者であること」、④「生者であること」、⑤「聴者であること」、⑥「見者であること」、⑦「話者であること」の7つである。

自体的属性は、本体 (dhāt) 自体を示すことから「自体的」と呼ばれ、否定的属性はアッラーフに相応しくないことの否定を示すことから「否定的」と呼ばれ、諸イデア (=属性) は、その全てがアッラーフの高貴な本体に内属するがそれ(本体)とは別の (qā'im bi-dhāt Allāh al='aliya wa zā'id 'alai-hi) 存在するイデア (ma'nā) であることから、「諸イデア (=属性)」と呼ばれ、イデア的属性は、諸イデアの派生であるために、「イデア的」と呼ばれる。(番号は訳者による挿入)、Walad 'Adlān, *Jāmi' Zubad al='Aqā'id al=Tauḥīdiyya fī Ma'rifa al=Dhāt al=Maṣūf bi-al=Ṣifāt al='Aliya*, Cairo, 1948, pp. 5-6.

諸イデア=属性とイデア的諸属性については以下のようにも言われる。

「イデア的属性」とは、本体に内属するイデアに起因して (mu'allala) 本体に発生した「状態 (ḥāl)」全ての別称であり、「本体に内属するイデアのために本体に付帯する属性の全て」とも言われる。……中略……

スンナ派の見解では、イデアとイデア的属性の間には、原因 ('illa) と結果 (ma'lūl) の対応関係 (talāzum) がある。al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsiya al=Kubrā*, Kuwait, 1982, pp. 172-173.

諸イデア=属性とイデア的諸属性両者の関係は必ずしも明らかではなく、アシュアリー派神学者の中にも「イデア的諸属性」の实在を否定する者もある。

マートゥリーディー派とムウタズラ派の神学者の中には、イデア的属性 (の实在) を認めている者もある。なぜなら彼らは、存在者 (maujūd) と非在者 (ma'dūm) の中間状態である「状態」 (の实在) を認めているからである。……中略……

アシュアリー派の大多数について言えば、彼らは「状態」 (の实在) を否定しているため、イデア的属性 (の实在) も否定している。Ḥasan al=Saiyid Mutawalli, *Mudhakkira al=Tauḥīd li-al=Ṣaff al=Thānawī min al=Marḥala al=Thānawīya bi-al=Ma'āhid al=Azhariya*, Cairo, 1987, p. 40. cf., al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsiya al=Kubrā*, pp. 171-172.

なお訳中のアッラーフの20の必然的属性の番号は訳者によるもの。

7 以下引用。

至高なる御方の存在の必然性の証明は、世界の生成 (ḥudūth) である。なぜならそれ (世界) に生成因 (muḥdith) がなく、自ら生じたならば (ḥadatha bi-nafs-hi), その対象 (世界) にとって (li-ṣāhib-hi) 等価な二つのもの (生成, 無生成) の一つ (生成) が、それ (世界) に対して (特別な) 理由なく選好された (rājiḥ 'alai-hi) ことになり、それは不可能であるからである。世界の生成の証明は、それが運動, 静止などの生成する偶有 (a'rāḍ) と不可分 (mulāzama) であるが、生成するものと不可分なものは (それ自体もまた) 生成するものであることである。偶有の生成の証明は、それが有から無に、無から有に変化することの観察にある。al=Sanūsī, *Matn al=Sanūsiya*, p. 4.

アル=クルディーによるアッラーフの必然性属性の証明は概ねMatn al=

Sanūsīyīyaなどの神学綱要の証明の要約である。以下ではアル＝クルディーの証明が簡潔に過ぎ、意味が明らかでないもののみ、対応する神学綱要の証明を引用する。

なおアシュアリー派神学の世界観の基本構造については、拙稿、「規範と存在」、『宗教の言葉』（島菌進，鶴岡賀雄編），大明堂，1993年，151-152頁参照。

8 以下，引用。

至高なる御方の無始性の必然性の証明は、もし無始でなければ、生成物となり、生成因 (muḥdith) を要することになり、それは循環（論法）か無限遡行を帰結するからである。 *ibid.*, pp. 4-5.

9 以下，引用。

至高なる御方の無窮性の必然性の証明（は以下の通り）。もしその御方に「無」が後続するなら、その時その存在は「可能」であり「必然」ではなくなることから、その無始性が消失し、生成物でしかなくなるが、ところがいましがた至高なる御方の無始の必然性の証明は完了している以上、その無窮性も（証明されたのである）。 *ibid.*, p. 5.

10 以下，引用。

至高なる御方の、生成物との乖違の必然性の証明は、もし何かと相同であれば、それと同様な生成物であることになるが、それは既にその御方の無始と無窮を知った故に不可能であるからである。 *ibid.*, p. 5.

11 以下，引用。

至高なる御方の自存の必然性の証明（は以下の通り）。もしその御方が基体を必要とするなら、その御方は属性 (ṣifa) であることになるが、属性は、諸イデアの諸属性 (ṣifāt al=ma‘āni), イデア的諸属性 (al=ma‘nawīya) (など更に別の属性) によって形容されることはない (lā tattaṣifu)。ところが威力比類なき我らの庇護者はこの双方（諸イデアの諸属性、イデア的諸属性）によって形容される以上、属性では（有り得）ないのである。 *ibid.*, p. 5.

- 12 「本体において唯一である」の意味には、「アッラーフの本体が諸部分からなる複合体ではない」と「本体においてアッラーフと対等なものは他にない」の両義がある。また「属性において唯一である」にも、「アッラーフには同種の属性が二つ以上重複しない（二つの別々の『能力』、二つの別々の『意思』など）」、「属性においてアッラーフと対等なものは他にない」の両義がある。

「行為において唯一である」とは、創造行為においてアッラーフに並ぶものではなく唯一であることを意味する。cf., al=Sanūsī, *Matn al=Sanūsiya*, pp. 3-4, al=Bājūrī, *Matn al=Bājūrī*, pp. 13-14, Bājūrī, *Sharḥ Jauhara al=Tauḥīd*, pp. 59-60, al=Dardīr, *Sharḥ 'alā Fawā'id al=Fawā'id*, p. 16.

神が2人存在するといった形で神が複数存在すれば、世界には何物も存在しないことになる。ところが観察（の教えるところ）によって世界は存在するが故に、『世界には何物も存在しない』（という命題）は虚偽である。つまり論理の帰結は『多神論 (ta'addud)』の虚偽であり、こうして多神論が虚偽となれば、(神の) 唯一性が証明されることになり、それが（ここでの）目的である。神が2人存在するといった形の多神論からは、世界には何物も存在しないことのみが帰結する。それは以下の理由による（番号は訳者）。

両者は（創造の意思が）(1)一致するか、(2)相違するかのいずれかである。

(1) 一致する場合

- ① 2人が同時にそれ（世界）を存在せしめることは、一つの結果 (athar) に二つの原因 (mu'aththir) が重複 (ijtimā') することになるために、不可能である。
- ② 甲がそれを存在せしめ、その後で乙がそれを存在せしめる、といった形で両者が順番にそれを存在せしめることも、既存者を重ねて創ること (taḥṣil al=ḥāṣil) になり、不可能である。
- ③ 甲が（世界の）一部を存在せしめ、乙が別の一部を存在せしめることも、そうすると両者共に無能となってしまうために不可能である。

というのも、甲の能力が（世界の）一部に負荷される (ta'allāqa) と、甲は乙に対して、乙の能力をその部分に負荷する道を閉ざし、乙はそれに抗することができないことになるが、これこそ無能であるからである。

これは一つのものに二者が競合 (tawārud) することから、「競合による証明」と呼ばれる。

- (2) 甲が創世を意思し、乙がその非在の意思するといった形で両者が相違する場

合

- ① 背反する二つのことが生じるため、両者が共にその目的を実現することは不可能である。
- ② 乙を差し置いて甲だけが目的を実現することも、両者は互角であり、甲と(能力が)等しいにもかかわらず、目的を実現できなかった乙の無能を帰結することになるために、不可能である。

イブン・ルシュド(哲学者, d. 1198)からも、「乙を差し置いて甲が目的を実現したとすれば、乙ではなく目的を実現した甲こそが神である」と(の言葉が)伝えられている。

こうして(神の)唯一性の証明は完了した。これ{(2)の議論}は二者の対抗(tamānu')と、対立(takhāluḥ)のために、「対抗による証明」と呼ばれる。Bājūrī, *Sharḥ Jauhara al-Tauḥīd*, p. 60.

- 13 哲学では、アッラーフは普遍のみを知り、個物を知悉しない、とされる。「哲学者は個物について至高なるアッラーフが知悉し給うことを否定し、不信仰に陥っている」*ibid.*, p. 68.
- 14 以下、引用。

至高なるアッラーフの聴覚は、耳によるのではなく耳の穴によるのではなく、その視覚は瞳によるのではなく眼によるのではない。Muḥammad al-Faḍālī, *op. cit.*, p. 55. 但し al=Bājūrī, *Matn al-Bājūrī*, al=Laqānī, *Matn al-Jauhara*, Aḥmad al-Marzūqī, *'Aqīda al-'Awāmm (Majmū' Mutūn al-Tauḥīd)*, al=Dardīr, *al-'Aqīda al-Tauḥīdiyya*, Muṣṭafā bn Aḥmad al-'Uqbāwī, *op. cit.*, Muṣṭafā al-Bakrī al-Ṣiddīqī, *op. cit.*, al=Dardīr, *Sharḥ 'alā Fawā'id al-Fawā'id*, などには、耳、眼によらないとの記述は見出だせない。

- 15 聴覚、視覚、発話の3つの属性の証明は、基本的にクルアーンとスンナとイジュマーウ、即ち啓示(sam')によるものとされる。cf., Bājūrī, *Sharḥ Jauhara al-Tauḥīd*, p. 86, al=Sanūsī, *Matn al-Sanūsīya*, pp. 5-6.
- 16 14から20まではイデア的属性であり、7から13の諸イデア=属性に対応している。注6, 参照。
- 17 以下、引用。

彼(アッラーフ)には悪と善の創造が可能である。al=Laqānī, *op. cit.*, p. 30,

Muḥammad al-Faḍālī, *op. cit.*, p. 67.

- 18 『日訳 サヒーフ・ムスリム』第3巻, 日本サウディアラビア協会, 平成元年, 310頁参照。
- 19 同上, 686-687頁, 『ハディース イスラーム伝承集成』牧野信也訳, 中巻, 中央公論社, 1994年, 323-324頁参照。
- 20 cf., al=Bājūrī, *Matn al=Bājūrī*, p. 16, al=Dardīr, *Matn al=Kharīda*, p. 5, al-Laḳānī, *op. cit.*, p. 30, Muḥammad al-Faḍālī, *op. cit.*, pp. 77-78, Sa'īd bn Sa'd Nabhān, *op. cit.*, p. 65, Aḥmad al=Marzūqī, *op. cit.*, p. 38, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 33-34. 但しAḥmad al=Marzūqī, *op. cit.*には「正直」, 「至誠」, 「伝達」, 「賢明」の言及はあるが, 必然との表現はない。cf., *ibid.*, p. 38.
- また「正直」, 「至誠」, 「伝達」のみが必然的とされており, 「賢明」の言及のないものもある。cf., al=Sanūsī, *Matn al=Sanūsīya*, p. 6. Muṣṭafā al=Bakrī al=Ṣiddīqī, *op. cit.*, p. 23, al=Dardīr, *Sharḥ 'alā Fawā'id al=Fawā'id*, pp. 23-24.
- 21 cf., Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 34-35, al=Bājūrī, *Sharḥ Jauhara al=Tauḥīd*, p. 124. 但し「心でなく目の眠り」との表現はない。

なお, 預言者の高い地位を傷付けない人間的属性の例としては「病氣」が挙げられることが多い。cf., al=Sanūsī, *Matn al=Sanūsīya*, p. 6. al=Bājūrī, *Matn al=Bājūrī*, p. 16, Aḥmad al=Marzūqī, *op. cit.*, p. 39, al=Bājūrī, *Taḥqīq al=Maqām*, p. 78.

但し癡狂, 失明, 痴呆 (balāda), 癩病 (bars, judhām) など人々に忌み嫌われるもの (umūr munaffira) は有りえないという。cf., Bājūrī, *Sharḥ Jauhara al=Tauḥīd*, p. 124, Sa'īd bn Sa'd Nabhān, *op. cit.*, p. 65, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 34-35, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 16.

なお神学綱要の最終的な形態では, 既述のアッラーフに必然的なこと (属性) 20, その対立概念である不可能なこと 20, アッラーフに可能なこと 1, 即ち全ての可能なことを行うこと, 行わないことが可能であること, 預言者に必然的なこと (属性) 4, その対立概念である不可能なこと 4, それに可能なこと 1, 即ち, この預言者の地位を傷付けない人間的性質を加え, 50の命題をムスリムの必要な信条とする。

「全てのムスリムには50の信条 ('aqida) を信ずる義務がある」Muḥammad al-Faḍālī, *op. cit.*, p. 14.

この50の信条を除く信条はクルアーン, ハディースの言葉によってしか知り得ない「伝聞による信条 (sam'iyāt)」と呼ばれ, 神学の主題としては二義的なもの

となり、クルアーン、ハディースの引用が中心となる。

22 以下、引用。

「預言者」とは語源的には「伝達者」を意味するが、専門用語としては、「従うべき法 (shar‘) を啓示されたが、その公布は命じられなかった自由人男性」を意味する。一方「使徒」とは語源的には「ある場所から別の場所に遣わされた者」を意味するが、専門用語としては「法 (shar‘) を啓示され、自分が従うのみならず、(人々へのその) 公布を命じられた自由成人男性」を意味する。Saiyid ‘Ali Haidar, *op. cit.*, p. 32.

23 cf., *ibid.*, p. 32, al=Dardir, *al=‘Aqīda al=Tauhīdiyya*, pp. 54-56.

一方Aḥmad al=Marzūqī, *op. cit.* はムハンマドをターハーに代えて 25 人と数えている。cf., *ibid.*, p. 39.

24 使徒の中でも特にムハンマド、イブラーヒーム、ムーサー、イーサー、ヌーフの 5 名は「重責の主 (ūli al=‘azm)」と呼ばれ、この順序で最も卓越した使徒とされる。cf., Muḥammad al=Faḍāli, *op. cit.*, p. 73, al=Bājūrī, *Sharḥ Jauhara al=Tauhīd*, p. 130.

25 cf., al=Laqānī, *op. cit.*, pp. 31-32, al=Bājūrī, *Taḥqīq al=Maqām*, pp. 74-75.

26 以下、引用。

天使は光からなる精妙な物体であり美しい様々な姿をとることができる。その任務は帰依 (tā‘a) であり、その住まいは基本的には天であるが、中には地にあって昼夜にわたって倦まず弛まず (アッラーフを) 賛美する者もある。彼らはアッラーフの命じられたことに背くことはなく、命じられたことを実行し、男性とも女性とも形容することはできない。天使を男性と呼ぶことは不義であり、女性とすることは不信仰である。というのは「彼らは慈悲深き御方 (アッラーフ) の僕である天使を女性であるとする。彼ら (天使) が創造されるのを彼らが目撃したとでも言うのか。彼らの証言は書き留められて、審問されることになる。」(クルアーン 43 章 19 節) との至高者の御言葉に反しているからである。また「天使は雌雄同体である」と言うものは、より重い冒瀆であり、なお不信仰なのである。al=Bājūrī, *Sharḥ Jauhara al=Tauhīd*, p. 131.

27 cf., Walad ‘Adlān, *op. cit.*, p. 26, al=Bājūrī, *Sharḥ al=Sanūsiyya*, Cairo, 1294 [h.], p. 66.

28 天使も死ぬとも言われる。

天使は第1のラッパが吹き鳴らされると死に、第2のラッパが鳴る前に復活させられる。Muṣṭafā bn Aḥmad al=Uqbāwī, *op. cit.*, pp. 51-52, cf., al=Bājūrī, *Sharḥ al=Sanūsīya*, p. 66.

29 *al=Marzūqī, op. cit.*, p. 39, Saiyid ‘Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 45, al=Dardīr, *al=Aqīda al=Tauḥīdiya*, pp. 51-54. 但しal=Marzūqī, Saiyid ‘Alī Ḥaidarは個体として知るべき天使を10人とし、善行と悪行を書き留める天使ラキープとアティード, al=Kāfiは加えてバシールとムバッシルの名を挙げている。cf., al=Kāfi, al=Ḥuṣn wa al=Janna, Cairo, 1324 [h], p. 83.

30 cf., Walad ‘Adlān, *op. cit.*, p. 20. その他、預言者の言葉によるとシス（セツ）の啓典（*ṣuḥaf*）、イブラーヒーム（アブラハム）の啓典、律法以前にムーサー（モーゼ）に下された啓典、イドリース（エノク）の啓典、アードム（アダム）の啓典があるとも言われる。cf., al=Bājūrī, *Sharḥ al=Sanūsīya*, pp. 66-67, Saiyid ‘Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 44, al=Marzūqī, *op. cit.*, pp. 39-40.

31 cf., Laqānī, *op. cit.*, p. 31.

32 cf., al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsīya al=Kubrā*, p. 387.

33 cf., Saiyid ‘Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 40, al=Bājūrī, *Sharḥ Jauhara al=Tauḥīd*, p. 160.

34 cf., Laqānī, *op. cit.*, pp. 33-34, Saiyid ‘Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 40, al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsīya al=Kubrā*, pp. 401-402, *op. cit.*, pp. 84-88.

35 al=Laqānī, *op. cit.*, pp. 33-34, Saiyid ‘Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 40, al=Dardīr, *al=Aqīda al=Tauḥīdiya*, pp. 59-63.

36 以下、引用。

信仰者に関してはアッラーフの御赦し、祈願か、金曜日の夜にはその（墓の）懲罰の中断も有り得る。Muḥammad Amīn al=Kurdī, *Hidāya al=Ṭālib li-Aḥkām al=Dīn ‘alā Madhhab al=Imām Mālik*, p. 9.

37 cf., *Concordance et Indices de la Tradition Muslmane*, Istanbul, 1986, vol. 1, p. 481.

38 Saiyid ‘Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 41, Muṣṭafā bn Aḥmad al=Uqbāwī, *op. cit.*, pp. 57-58.

39 al=Laqānī, *op. cit.*, p. 33, Saiyid ‘Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 41, al=Dardīr, *al=Aqīda al=Tauḥīdiya*, p. 58, Muṣṭafā al=Bakrī Ṣiddīqī, *Fawā’*

- id al=Fawā'id*, p. 27, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 21.
- 40 al=Laqānī, *op. cit.*, p. 34, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 46-47, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 31.
- 41 al=Laqānī, *op. cit.*, p. 33, al=Dardīr, *Matn al=Kharīda*, p. 5, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 43, al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdīya*, pp. 58-59, *Muṣṭafā al=Bakrī Ṣiddīqī, Fawā'id al=Fawā'id*, p. 26, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 31.
- 42 al=Laqānī, *op. cit.*, p. 34, al=Dardīr, *Matn al=Kharīda*, p. 5, Muṣṭafā bn Aḥmad al='Uqbāwī, *op. cit.*, pp. 65-66, al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsīya al=Kubrā*, p. 399. 但し「その本当の形 (ḥaqīqa) はアッラーフのみが御存じである」とも言われる。al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdīya*, p. 65, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 43.
- 43 al=Laqānī, *op. cit.*, p. 34, al=Dardīr, *Matn al=Kharīda*, p. 5, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 44, al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdīya*, pp. 63-65, Muṣṭafā al=Bakrī Ṣiddīqī, *Fawā'id al=Fawā'id*, p. 26, Muḥammad al=Faḍūlī, *op. cit.*, p. 80, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 21. al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsīya al=Kubrā*, p. 399.
- 44 cf., *Concordance et Indices de la Tradition Muslmane*, vol. 3, p. 481.
- 45 al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdīya*, p. 70, al=Sanūsī, *Matn al=Sanūsīya*, p. 17, al=Dardīr, *Matn al=Kharīda*, p. 5, Muḥammad al=Faḍūlī, *op. cit.*, p. 80, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, p. 45, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 21. 但し, 「スィラート」の前後に二つの「湖」があるとの説もある。cf., al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsīya al=Kubrā*, p. 405.
- 46 cf., *Concordance et Indices de la Tradition Muslmane*, vol. 1, p. 528.
- 47 al=Laqānī, *op. cit.*, p. 34, al=Dardīr, *Matn al=Kharīda*, p. 5, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 48-49, al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdīya*, pp. 66-68, Muṣṭafā al=Bakrī Ṣiddīqī, *Fawā'id al=Fawā'id*, p. 26, Muḥammad al=Faḍūlī, *op. cit.*, p. 80, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 21, al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsīya al=Kubrā*, p. 400.
- 48 al=Laqānī, *op. cit.*, p. 30, al=Dardīr, *Matn al=Kharīda*, p. 5, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 29-31, al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdīya*, p. 39, Muḥammad al=Faḍūlī, *op. cit.*, pp. 71-72, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 21, al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsīya al=Kubrā*, pp. 308-335.
- 49 al=Bājūrī, *Matn al=Bājūrī*, p. 17, al=Laqānī, *op. cit.*, p. 35, Saiyid 'Alī Ḥaidar,

- op. cit.*, pp. 42-43, al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdiyya*, pp. 73-74, Muḥammad al=Faḍūlī, *op. cit.*, pp. 80, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 21, al=Sanūsī, *Sharḥ al=Sanūsīya al=Kubrā*, p. 405, al=Bājūrī, *Sharḥ Jauhara al=Tauḥīd*, pp. 186-188.
- 50 cf., *Concordance et Indices de la Tradition Muslmane*, vol. 2, p. 266.
- 51 cf., *Concordance et Indices de la Tradition Muslmane*, vol. 3, p. 148.
- 52 以下, 引用。

アッラーフは僕の一部を聖者とされるが, 彼ら(聖者)は, 能力の限りアッラーフの真理(ḥaqq)と僕('ibād)の真理を実践する者(qā'imūn)のことであり, 彼らには恩寵としての超常現象(karāmāt khāriqa al='āda)が生ずる。al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdiyya*, p. 72. cf., Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 47-48.

ここでのアル=クルディーの聖者論は, 神学綱要には平行する表現はなく, むしろスーフイズムの議論からの借用と思われる。

- 53 cf., al=Bājūrī, *Sharḥ al=Jauhara*, p. 181. al=Laqānī, *op. cit.*, p. 34, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 44-45, al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdiyya*, p. 68, al=Dardīr, *Matn al=Kharīda*, p. 5.
- 54 cf., al=Bājūrī, *Sharḥ al=Jauhara*, p. 181. al=Laqānī, *op. cit.*, p. 34, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 44-45, al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdiyya*, p. 68.
- 55 cf., al=Bājūrī, *Sharḥ al=Jauhara*, p. 181. al=Laqānī, *op. cit.*, p. 34, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 44-45.
- 56 cf., al=Bājūrī, *Sharḥ al=Jauhara*, p. 181. al=Laqānī, *op. cit.*, p. 34, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 44-45.
- 57 al=Laqānī, *op. cit.*, p. 30, Muṣṭafā al=Bakrī Ṣiddīqī, *Fawā'id al=Fawā'id*, p. 26, al=Dardīr, *Matn al=Kharīda*, p. 6, Saiyid 'Alī Ḥaidar, *op. cit.*, pp. 38-39, al=Dardīr, *al='Aqīda al=Tauḥīdiyya*, p. 79, Walad 'Adlān, *op. cit.*, p. 22.

アシュアリー派によると, 「予定(qaḍā')」とは, アッラーフの永遠の意志であり, 可能(的存在)者(mumkin)に可能である何かを特定すること(takḥṣīṣ)に関与(muta'allīqa)する意志である。マートウリーディー派によると, 「予定」とは, アッラーフの永遠の知識であり, 万物の存在に関与(muta'allīqa)する知識である。

アシュアリー派によると, 「決定(qadar)」とは, 永遠の(アッラーフの)意志に沿っての存在付与(ijād)の別称(kināya)であり, 「生成するもの(ḥāditha)」

である。マートゥリーディー派によると、「決定」とは、(アッラーフの)知識に則る万象への存在付与である。

アシュアリー派、マートゥリーディー派の両派のどちらの考えでも、「予定」は、本体が属性の関与 (ta'alluq) によって限定される「本体属性 (ṣifa dhāt)」であって、永遠であるが、「決定」はマートゥリーディー派によると行為属性であって永遠であるが、アシュアリー派によると「生成するもの (ḥāditha)」である。Saiyid 'Ali Ḥaidar, *op. cit.*, p. 39. cf., al-Bājūrī, *Sharḥ al-Jawhara*, p. 113.

アル=ウクバーウィーによると、「予定」はアル=アシュアリー派の考えでは、知識、あるいは意思、あるいは両者の関与 (ta'alluq) であり、永遠かつまた「生成するもの」となるが、アル=マートゥリーディー派の考えではアッラーフの行為であり「生成するもの」となり、他方「決定」はアル=アシュアリー派の考えでは万象の存在付与であり「生成するもの」となり、アル=マートゥリーディー派の考えでは万象の知悉であり本体属性となり、永遠である。cf., Muṣṭafā bn Aḥmad al-'Uqbāwī, *op. cit.*, p. 79.